

1989. 1



はるかにくす

No. 18

学校法人大阪工大摂南大学図書館報

私の読書

総長・理事長

藤田 進



1. 昭和の始めの頃

私の図書館活用の始まりは、昭和4年、学園の前身の関西工学校入学の頃であった。当時は学園の草分期でもあり、学校の図書館は皆無に等しく、このため大阪の市立や区立の図書館通いをした。そのつらさを今でも忘れることができない。

また当時は世界的不況のさなかで、銀行の取り付け騒ぎなど世はパニック状態であり、失業者は町に溢れ自らも失業するなど、必要な書物を自費で求めることは不可能であった。それだけに必要に迫られての図書館での読書であって、読後、久しく脳裏に深く刻みこまれ、有効なものであった。

2. 記憶に残る読み方

およそ活字を読むことの意味はいろいろある。たとえば列車の中などで退屈紛れに週刊誌を手にするその場限りの時間潰しもある。また、自らの必要に迫られて専門書など読まねばならない学習的・研究的な読書もある。その他、一般常識として広く知識を身につける読書もあるが、いずれにしても必要と思われる事項については、永く脳裏に刻みこまなければならない。

古い言葉に「心頭滅却すれば火も亦涼し」という言葉があるが、読書に際し必要に迫られ精神を集中した状態で読む場合は、たとえ付近にテレビや大声があっても、なんら耳に入らず読み切ることができるものである。

故に、学習などの書物は、精神の集中できる状態の中で読むことが大切である。気分がすぐれず気もそぞろな状態では、読んでも全く意味がない。

3. 自らの書物を持って
私の学生時代は、経済的理由もあって、必要な書物を購入することが困難な状態であったが、自らの経験から、そのような中でも職業活動家として生涯必要な専門書などは、自らの書架に収めることが大切であることを知った。

このような手元に置いた書物によって、先輩の研究業績などを参考にしながら、やがては、それを追い越す自らの時代的業績を築くことが大切である。

4. 繰り返し読むことが必要

一度、目を通しただけでよい書物もあるが、自らの専攻に必要なものについては、時折正確を期する意味で繰り返し読む必要がある。同時に、次第に自らの正しい先進的な学説などを確立してゆくことが大切であると思う。それだけの批判力を持つことと自らの学説を確立するように努めることが、進歩であり人生にとって不可欠であると思う。

5. 図書購入の再検討

私は、長い国会議員生活の中で特に国立国会図書館運営委員を努めてきたが、国立国会図書館の場合は、あらゆる古文書はもとより時々の新刊書の総てを収容することになっており、その規模は国内のみならず諸外国にも及ぶのである。従って、いま何が必要かということよりも、出版活動の総てを対象としているため、書庫も超膨大な増築をするに至った。それはそれなりに国立国会図書館に行けば何でもあるということで、利用者も広範で日本全国にわたっているのである。

高等教育機関の付属図書館においては、国立国会図書館と異なり、必要と思われる図書に重点を置いて購入している。然るに、その中でも何年も繙かれぬ書物もある。このような書物については、購入そのものを再検討し冗費を削って、その予算の余剰を以て学生を中心としたサービスの強化を図るよう心掛けるべきではないだろうか。

近時、あらゆる方面の新刊書が氾濫する出版ブームの時であるだけに、特に購入図書の内容の検討が必要と思われる。年々多数の死蔵図書が累積しその保管に困るのみならず、乏しい予算の無駄使いとなっている状態がありとせば、各方面の自戒を望むものである。

6. 本学園図書館関係者の労を謝す

本学園図書館には、大阪工大にはⅡ部があり摂南大には理工系と文科系の学部があり、それぞれのニーズを満たすには、関係者の大変な労苦を伴うであろうが、利用者と図書館管理運営者とのコンセンサスを十分にすると共に、常にサービスの向上のため改善を図ってゆかねばならない。

私は、多忙に紛れ図書館への気配りが薄くなりがちで誠に恐縮に思うが、これから図書館運営について勉強し、図書館関係者と共に立派な図書館にしていきたいと考えている。図書館関係者のご協力を求めて已まない。

(経済学博士)

希望図書購入制度／私はこう利用した

本にとりつかれて…

工大・A4

ト 部 淳

僕が本を読むようになったのは、ヨーロッパに一人で出かけたことが大きなきっかけになっていると思う。

旅行中多くの外国人と話す機会を得たが、外国人は日本人とちがって議論好きであり、政治や経済また身の廻りのあらゆる問題について、自分の意見をしっかり持っていた。

このことは僕にとって大きなショックであると同時に強い刺激にもなった。つまり、彼らは目前にいろいろな問題が立ちだかかったとき、決して逃げることなく、その原因を究明し、解決策を考えるよう習慣づけられている。すべてがそうとは言えないが、僕の出会った外国人の多くは、見事なまで合理的かつ論理的な思考や対応をしていた。

そのことのショック — これをカルチャー・ショックというのだろうか — が刺激となり、帰国してから僕は何かにとりつかれたように本をむさぼり読むようになった。

もともと僕は大学に入学するまでは、全くと言っていいほど読書らしい読書はしてこなかった。それは多分、本というものが、それまでは僕にただ読みなさいと迫る強制的なものにしか見えなかったからだろう。これは受験勉強の悪影響かもしれない。本来、本というものは、疑問に感じたことを調べたり、興味のあることに

対して知識を得るためにある筈なのだから…。

とにかくそれ以来、本を読むことは僕の生活に不可欠なものとなった。ヒマがあれば書店をのぞき物色した。しかし、金銭的な面からも実際購入するのは、安価な文庫本に偏らざるを得なかった。ハードカバーの本など高嶺の花で、月に一度アルバイトの給料が入ったときに、書棚の前で何度も迷ったすえ思いきって購入するという始末であった。

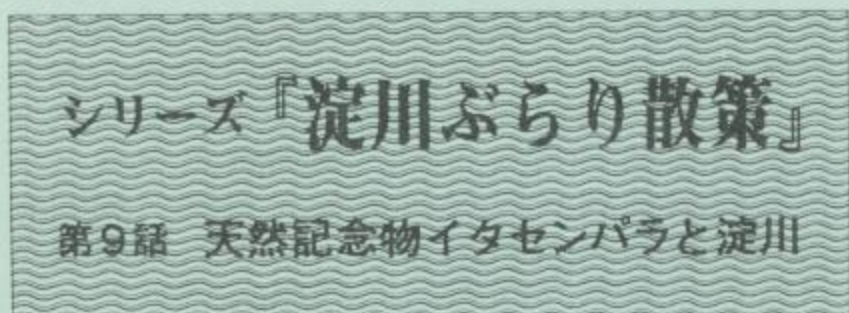
そんなある日、図書館に希望図書購入制度というのがあることを知った。僕は、これは利用しない手はない、ダメでもともととばかり、用紙に読みたい本を書いてメインカウンターに提出した。今までに出版されて高価なため手が出なかった本を主に希望した。

四、五日して掲示に「購入可」という通知が出、さらに二、三週間して、「本が入りました」という掲示が出た。その通知書を早速メインカウンターに持って行き貸出の手続きをした。

分厚い、まっさらの本を手にしたときは不覚にも感激した。

自分の力で購入でき、しかも自分が一番初めに読めるんだという快感はその後も禁じがたく、新聞や雑誌で面白そうな本が紹介されたときは、自分の専攻にこだわらず希望図書の申込をするようになった。

〔編集部から〕希望図書購入制度による購入図書は、昨年度実績で約 400冊であり、利用者は、現在のところまだほんの一部の少数者に限られています。図書館では、この制度を少しでも多くの人に利用していただき、皆様とともに図書の充実をはかっていきたいと考えます。



淀川を代表する魚



淀の川面に夕暮れが迫る頃、ひとり川辺に佇みながら、葦の穂影が川面にゆらゆらと漂うさまに見入るうち、いつしか、あたり一面は夜の帳の中にある。夕陽は紅く紅く波間に照り返り、河原のあたりは、暮れゆく陽の光りの中で次第に翳りを増していく。この光と影のコントラストの中に描き出される情景は、いつの季節に見ても美しく、また少し物悲しい趣を宿している。

わらべ歌に、「大阪は、橋でもつ。京は、寺でもつ。尾張名古屋は、城でもつ。」と唄われているように、大阪は水の都であった。それが明治以降の産業の勃興に伴い、「煙の都」と呼ばれるようになり、次第に自然景観は蝕まれていき、遂には昭和40年代に入り、公害問題を生み出すに至った。水質も汚染が進み、川辺に棲息していた数多くの魚や野鳥等が、次々と姿を消していったのであった。

この汚染の進む淀川において、昭和46年に下流域の赤川鉄橋付近の、また上流域の枚方市内の「わんど」で、相次いで地元の高校と中学の生物クラブによって、イタセンパラが発見された。イタセンパラは、コイ科タナゴ属の淡水魚で、淀川を代表する魚である。昭和49年には、国の天然記念物に指定されている。イタセンパラは外来語ではなく、「板鮮腹」と書く。鮮かな腹（鮮腹）を持ち、板のように体が薄いところから、「板鮮腹」と呼ばれるようになったと言う。このイタセンパラは極めて弱い魚で、この魚が棲息できれば他のどんな魚や生物も棲息できると言われている。イタセンパラが発見された「わんど」はいずれも本流から離れた河川敷にある「わんど」であった。本流の水がろ過され、伏流水となってきれいな水が溜っていたのが、この魚の絶滅を救ったのであった。

淀川水系は、全国の河川の中でも最も魚種の

多い河川であり、またヒバリ、シギ、チドリ等の水辺の鳥を中心に 180種の鳥と、チョウ、トンボ、テントウ虫等の昆虫 500種類が棲息する「生物の宝庫」である。そしてその大半が、河川敷の「わんど」に棲息していると言われている。

「わんど」は淀川特有のもので、他の河川では見られない。昔からたくさんの舟の往来のあった淀川では、舟の底がつかないように水深を保ち、同時に流れを緩やかにするために、本流の流れに対して、垂直に何本もの石積みを行う治水工事が行われた。長い年月のうちに、この石積みの所に土砂がたまり、次第にあちこちに沢山の池ができた。この池のことを、わんど(湾所)と呼ぶようになったと言う。

淀川では昭和46年から全国にさきがけて、公園化等の目的で河川敷のわんどを埋立てる改修工事が始められた。このため、それまで 500を数えたわんども次第に埋立てられ、現在では、100余個に減っているといわれる。河川の汚染とわんどの埋立てにより、生物の生息が懸念されるに至り、昭和51年にイタセンパラの主棲息地である大阪工業大学裏のわんど等、5か所の保存計画が決り、昭和52年より保存工事が行われた。このように、イタセンパラの発見は、自然保護への関心を高め、また淀川の自然を考えなおす契機となった。

一時は、絶滅を心配されたイタセンパラであるが、昭和61年7月大阪府淡水魚試験所は、イタセンパラの人工増殖試験に成功したと発表した。また、ここで増殖された親魚をわんどに放流したところ、卵が見事に孵化し、ち魚が泳ぎだすのが確認された、ということである。

図書館活用の手引き⑬

新聞読みくらの意義

情報化時代といわれる今日、多種多様の情報が各種メディア（媒体）を通じて伝達されます。メディアのなかでは、とりわけコンピュータや光通信などの最新技術を駆使したニューメディアが注目を集めていることはご承知のとおりです。

しかし、このことは在来のメディアの役割が一樣に後退したことを必ずしも意味するものではありません。とくに新聞は、その手軽さ、親しみやすさとあいまって、すたれるどころか今後もいよいよ人々の“暮しの友”として健在であり続けるものと思われまます。

“暮しの友”と書きましたが、朝起きてコーヒーを飲みながら新聞をひらき…というのはまさに生活そのものですし、とくにサラリーマンなど出勤前に業務関連の情報に目を通しておくことは、必須の心構えとされています。

学生諸君の場合も、めまぐるしい社会の動き、政治・経済の動向、科学技術の進展等から取り残されることなく、広い視野と的確な洞察力を養っていくうえで、新聞の閲読は欠かせないものと言えるでしょう。

中央図書館では、現在五つの総合紙（朝日・毎日・読売・サンケイ・日経）— いわゆる全国紙 — と三つの専門紙（日刊工業・日経産業・日経金融）ならびにスポーツ紙（デイリー）、英字紙（Mainich Daily News）の10紙を定期受入れし、皆様の利用に供しています。これらは第

編集後期

☆「昭和」の終幕とともに、「平成」の新時代を迎えた。新しい時代への期待感は何…と思いつめながらも、まだ実感がさほど迫って来ない。

とにかく分秒はよどみなく刻まれるし、日常は相も変わらずあわただしい。

☆あわただしいと言え、中央図書館も、はや最混雑の時期に入った。後期試験が近づいたため、来館者の大半は、図書館を“自習室”と見たてての利用のようだ。試験が終ればさっと潮のように退いてしまう。もっと本来の利用を……と願わざるを得ない。

☆本来の利用を喚起させるためには、図書館をもっと魅力的にすることが必要。そのためには、本号での藤田総長のご指摘のとおり、常にサービス向上のための改善を図っていかねばなるまい。

藤田総長には、超ご多忙の合間をぬってのご寄稿を頂きました。紙上を借りて、ありがとうございました！

2 図書室(3F)に配架されており、室内で自由に閲覧することができます。

朝日・毎日・日経・日刊工業の4紙については、縮刷版も備えており、過去に遡ってニュースを調べたりすることもできます。

そのほか、各種機関から入手した新聞類も同様に閲覧に供しています。

ところで、新聞普及率の高い我国では、各家庭でもまず1紙は購読しているのが普通ですが、他の同種新聞と読みくらべたりする機会は案外少いようです。

他方、主要新聞が、例えば第1面をとりあげても、トップ記事がすべて同一という例は意外に少ないことから解るように、一口に「事実の報道」と言ってもそこにはかなりの“差異”が存在します。これは意識的に読みくらべを試みなければ、つい見のがしてしまうことです。

真理追求や柔軟な思考の前提となる批判精神は、この読みくらの姿勢なしには育ちません。

とすれば、図書館で新聞を読むことの第一の意義は、まさにそこで読みくらべができるという点にあるのではないかとと言えます。

気軽に利用して、ナウイ知識とフレキシブルな思考を身につけて下さい。

お 知 ら せ

日曜開館

開館日：1月15日、22日、29日の日曜日

利用時間：10時～17時

対象：原則として工大生・短大生に限る
なお、22日と29日はレストラン白馬も営業

春期特別貸出

対象：次年度（89年度）在籍予定者

貸出冊数：6冊以内

受付期間：2月1日～3月31日

なお、春休期間中も原則として開館します。
(以上、詳細は別途掲示にて発表)

学校法人大阪工大摂南大学図書館報

No.18 (1989.1)

編集発行 大阪工業大学中央図書館

〒535 大阪市旭区大宮5丁目16番1号

TEL 06-952-3131